

いじめ被害者の環境認知¹

Environmental perception among victims of bullying

人間社会学科 波多野 純

1. 目的

本稿の目的は、児童・生徒のいじめに関する心理学的研究を概観し、「被害者視点の欠如」という従来の研究の問題点を指摘するとともに、いじめ被害者の環境認知に関する今後の研究の課題を提示することである。

2. 教育現場におけるいじめ問題の経過と現状

わが国でいじめが社会問題として注目されるようになったのは、1980年代半ばのことである（森田, 2010; 加野, 2011）。1970年代から1980年代にかけて、教育現場では校内暴力、登校拒否（不登校）、中途退学、非行などの問題が次々に噴出したが、いじめもその頃から教育現場の問題として認識され始めていた。やがて「いじめ」という言葉を名詞として使用する表現が一般化し、1984年には文部省（当時）の指導書に初めて「いじめ」が登場した。さらに翌年には、文部省の検討会議委員による緊急提言（文部省, 1985）が出されるなど、いじめに対する問題意識は一気に高まり、解決すべき喫緊の課題として認識されるようになった。

ところが、いじめ問題は容易に解決せず、その後30年にわたって存続することになった。被害者の自殺によっていじめが事件化し、それが集中的に報道されることで社会の注目を集めるという状況は、ほぼ10年間隔で3度繰り返され、現在に至っている（森田, 2010; 加野, 2011; 高塚, 2011）。いじめへの注目を集める契機となった事件としては、1986年の東京都中野区中学2年生徒自殺事件（鹿川裕史君事件、「葬式ごっこ」が注目された事件）、1994年の愛知県西尾市中学2年生徒自殺事件（大河内清輝君事件、多額の金銭が脅し取られていた事件）、2006年の北海道滝川市小学6年児童自殺事件および福岡県筑前町中学2年生徒自殺事件（森啓祐君事件）があげられる。いずれの事件においても、被害者が継続的にいじめを受けていたにもかかわらず、適切な対応がとられないまま自殺という最悪の結果が生じており、いじめをめぐる状況が変わっていないとの印象を社会に与えるものであった。

この間に教育現場や行政が何も対策を打たなかったわけではない。酒井（2006）や粕谷（2014）が整理しているように、過去3度にわたる社会問題化の中で、政府による対策会議の設置、実態把

1) 本研究はJSPS科研費25590198の助成を受けた。

握のための調査，相談体制の整備，加害者の出席停止（厳罰化）など，さまざまな対策がとられてきた。2013年には「いじめ防止対策推進法」が成立し，いじめへの対応と防止について学校や地方公共団体等の責務が規定された。

しかし，こうした対策にもかかわらず問題が繰り返されてきた事実は，いじめへの対応や介入に有効な方法が現在も求められており，その開発に資する研究が急務であり続けていることを示しているといえよう。

3. いじめ研究の概観

いじめに関する研究がわが国で盛んになったのは，いじめの被害にあった児童・生徒の自殺が社会的に大きな注目を集めて以降のことである。メディアにおける議論の高まりと並行して，教育学，心理学，社会学などの分野で研究が進められてきた。CiNii Articlesで「いじめ」を検索語として論文検索を行うと6,200件がヒットするが（2014年9月30日時点），1979年までに公刊された論文はわずか14件であり，しかもその中で学校教育におけるいじめを扱った研究は3件のみであった。研究が急増するのは1985年頃からである（森田，2010；芹沢，2007；戸田，2010も参照）。

初期の研究では，「いじめっ子／いじめられっ子」に特徴的な性格や行動傾向，家庭環境等を抽出することが試みられた（蔭山，1987；杉原・宮田・桜井，1986）。しかし，さまざまないじめ事例が報告されるにつれて，いじめの加害者と被害者が固定せず流動化するような例が知られるようになり，特性論的なアプローチには限界が指摘されるようになった（芹沢，2007；下田，2014）。やがて，森田・清水（1986）がいじめの4層構造論を展開して集団構造への注目を促すと，研究の視野は個人の特性や個別の人間関係からいじめを取り巻く集団の力動へと広がった。

いじめの4層構造論は，いじめを被害者・加害者・観衆・傍観者という4層の同心円構造をもった集団現象として把握するモデルである。このモデルでいう「観衆」とは，被害者を直接攻撃はしないものの，いじめ行為をはやし立てたり肯定したりして促進する成員のことであり，「傍観者」とは，いじめを認知していながら関わりをもとんとせず黙認し，結果的にいじめの継続を支える成員のことである。このような観衆や傍観者の存在は，「いじめ」が加害者と被害者だけで構築されているのではなく，より複雑な集団力動のもとに成立していることを主張するものであった。そしてそのような認識は，いじめ研究の領域に集団規範や同調行動，傍観者効果，スケープゴート，ステレオタイプなどの社会心理学的概念を適用することを促した（たとえば大西・吉田，2010；大野，1996；大野・長谷川，2001；竹村・高木，1988）。

さらに，近年では関係性攻撃（Crick & Grotpeter, 1995；磯部，2002）や社会的排斥（Williams, Forgas, & Von Hippel, 2005）のような，いじめ以外の場面にも見られる行為の研究と合流して，攻撃行動というより大きな研究枠組みの中でいじめの基礎的メカニズムの解明が進んでいる。また，国際比較研究（たとえば森田，2001）の進展によって，いじめを日本の教育現場に固有の問題として捉えるだけでなく，世界中で観察される普遍的な現象として理解する視点も，教育現場ならびに

研究者に共有されるようになった。

4. 被害者研究の課題

いじめの構造やメカニズム、当事者たちの特性の分析などをいじめの基礎研究と位置づけるならば、教育現場ではいじめの予防・介入および被害者支援のための実践的研究が基礎研究と並行して行われてきた（たとえば本間, 2003; 石田・中村, 2002など）。現場の教師のほかに、スクール・カウンセラーやソーシャルワーカーによるさまざまな支援の取り組みが報告されている（本間, 2008; 鈴木・鈴木, 2008）。しかし現段階では、わが国の教育現場で有効に機能する介入・支援プログラムの開発には至っておらず、模索が続いている状況である。

いじめに対する組織的で包括的な予防・介入プログラムの研究としては、Olweus (1993) による取り組みがヨーロッパを中心に広く知られている。ところがOlweusのプログラムをわが国に適用しようとする、学校教育や子育てを取り巻く文化・環境の相違が制約となり、有効性に限界があるとの指摘がある（森田, 2010）。また、いじめが多様な行為を含み、当事者の関係が複雑化していることも、介入や支援をむずかしくする要因となっている（坂西, 2011）。したがって、いじめへの介入や支援の研究を進めていくためには、いじめの正確な被害実態を踏まえつつ、被害者の支援に何が求められるのかを当事者の視点から把握することが、まずは必要であろう。

ところが、国内外のいじめ研究を展望した近年の論文をみると（齊藤, 2000; 下田, 2014; Swearer, Espelage, Vaillancourt, & Hymel, 2010; 戸田, 2010）、被害者の視点からいじめの理解を試みた研究はきわめて少ないようである。いじめの被害者を対象とした研究——たとえば、いじめが被害者の精神的健康に及ぼす影響（坂西, 1995; Smith, Talamelli, Cowie, Naylor, & Chauhan, 2004）や、いじめへの対処行動（上地, 1999）、あるいは他者の攻撃を誘発する被害者の特性（竹川, 1993）などについては研究が行われているが、そのような被害や対処行動をもたらす「いじめ」という状況を、被害者がどのように認識しているのかという基本的情報は得られていないように思われる。現在わが国で一般的に用いられているいじめの定義が、被害者の立場に立った判断を重視していることを考えると（文部科学省, 2013; 森田, 2010; 加野, 2011）、被害者のいじめ理解の特徴を明確に記述し、その影響を解明することは、いじめ研究において不可欠の課題であろう。

被害者によるいじめ認知が他の当事者とは異なっている可能性を示した研究として、竹ノ山・原岡（2003）の研究がある。竹ノ山・原岡（2003）は、架空の対人関係における葛藤場面を提示して、登場人物（加害者・被害者・傍観者）の視点でその場面がいじめであるかどうかを判断させる実験を行った。その結果、被害者の視点で判断する場合には、一貫していじめや排除の被害性を軽視する傾向が見られたという興味深い報告を行っている。竹ノ山・原岡（2003）の研究は、いじめにおいて被害者の認知が他の当事者や集団成員とは異なるものであることを示唆しているが、この問題を探求した新たな研究は行われていないようである。

被害者の視点でいじめを理解することの重要性は、援助要請の研究からも示唆されている。いじめを早期に発見し、介入へつなげるための重要な行動のひとつとして、被害者が周囲の教師等に行う援助要請が以前から研究されてきた (Newman, Murray, & Lussier, 2001; Smith & Shu, 2000; 山中・平石, 2013)。Eliot, Cornell, Gregory, & Fan (2010) は、7,000人余の高校生を対象に調査を行い、生徒が教職員を支持的だと感じている学校では援助要請が行われやすいことを見出している。また、山中・平石 (2013) は、Eliotら (2010) の調査結果が生徒の孤立傾向によって異なるかを検討し、生徒の孤立傾向にかかわらず、教師を支持的だと感じている生徒は援助要請を行う意志が強いことを確認している。しかしその一方で、いじめの渦中にある被害者が他者に相談することのむずかしさも指摘されている (木村・濱野, 2010; Olweus, 1993)。木村・濱野 (2010) の研究では、いじめの被害に直面すると誰も信用できないと感じることや、援助要請によっていじめが悪化する不安を感じるが見出されている。木村・濱野 (2010) の研究は一般の大学生を調査対象としており、いじめの被害経験をもたない者を多く含んでいるため、必ずしも実態を反映していない可能性があるものの、同様の不安は他の研究でも示されている (Newman, Murray, & Lussier, 2001; Unnever & Cornell, 2004)。これらの知見は、いじめを受けている被害者に利用可能な援助資源 (たとえば生徒に対して支持的な教師など) があつたとしても、そのことが必ずしも援助要請につながるとは限らず、被害者が周囲の環境をどのように認知しているかによって有効性が異なることを示唆している。

このように、いじめの研究に被害者の視点を導入する試みはいくつかみられるものの、現在までの成果は必ずしも満足できるものではない。そこで以下では、被害者がいじめに直面した時に、自分を取り巻く環境世界をどのように認知し、そのことが被害者にいかなる影響をもたらすのかについて、社会心理学における孤立者の環境認知に関する研究を中心に展望し、いじめ研究に与える示唆について論じる。

5. 孤立者の環境認知

いじめの被害者は、自分が生きている世界の急激な環境変化に直面する。その中でも多くの被害者に共通する経験のひとつが孤立である。中井 (1997) は、いじめの進行にともなって被害者がいかに孤立無援化していくかを段階的なモデルで表現しており、3つの段階に区分されたこのモデルの最初を「孤立化」の段階としている。孤立化の段階とは、加害者が周囲に対して誰が標的 (被害者) であるかを知らせ、被害者がいつどこにいても孤立無援であることを実感させようとする時期であるという。この孤立化の段階において被害者は、「一種の警戒的超覚醒状態」(p.11) に陥るとされ、常に緊張しゆとりのない状態になると考えられている。いじめの被害者が知覚した孤立感の程度は、いじめによるストレスの影響を調整する要因と考えられており (Newman, Holden, & Delville, 2005)、孤立の影響はいじめ研究において重要なテーマであると考えられる。

孤立や社会的排斥の状態にある個人が、周囲の環境に対する認知変化を経験することは、社会心

理学において以前から指摘されていた。孤立や孤独感は、社会心理学の領域において研究が蓄積されてきた重要なテーマであるが（落合，1999），近年の研究は，孤立が人間にとってきわめて否定的で脅威を感じる状況であることを明らかにしている（Cacioppo & Hawkley, 2009; Cacioppo & Patrick, 2008）。また，孤立に限定された議論ではないものの，なんらかの脅威状況下にある個人や集団が知覚の歪みを経験することは，Easterbrook（1959）などのニューロク心理学やStaw, Sandelands, & Dutton（1981）による脅威－硬直化効果（threat-rigidity thesis）などの研究によってよく知られた現象であった。貧困状態にある子どもは貨幣の大きさを過大視し，恐怖や強いストレス状況下にある個人や集団は視野を狭め，思考の柔軟性を失うと言われている（レビューとして波多野，2009）。同様に，社会的排斥もひとを孤立させ脅威状況をもたらす要因の一つである（MacDonald & Leary, 2005; Williams, 2001; Williams, Forgas, & Von Hippel, 2005）。社会的排斥によって孤立した個人は，健康リスクの高まりに直面し（浦，2009），痛覚が鈍磨するなどの知覚異常が生じ（DeWall & Baumeister, 2006），排斥を予期させる環境中の手がかりに敏感になる（MacDonald & Leary, 2005）など，さまざまな影響を受けることが明らかにされている（包括的なレビューとしてSmart Richman & Leary, 2009）。

このように，孤立や社会的排斥が個人にとって脅威であることは多くの研究が示しているものの，それらの成果がいじめ被害者の経験と結びつけられては来なかった。そのため，いじめによって孤立した者が，周囲の環境をどのように認知するかについて理解する手がかりは，あまり蓄積されていない。児童・生徒が学校環境をどのように認知するかについて研究してきた環境心理学や行動地理学も，空間認知やメンタルマップ等の概念ツールを提示しているものの（たとえば中村・岡本，1993; 佐古・小西，2007），その知見はいじめの研究に適用されておらず，被害者の視点による環境認知の解明は進んでいない。したがって，孤立した被害者にとって友人や教師，あるいは教室や学校といった環境がどう感じられるようになるのか，よくわかっていない。

そうした中で，Harberらが提唱する資源－知覚モデル（Resources and Perception Model; Harber, Einev-Cohen, & Lang, 2008; Harber, Yeung, & Iacovelli, 2011）は，いじめ研究における被害者視点の欠落を埋め，孤立の研究との橋渡しを行うモデルとなるかもしれない。資源－知覚モデルでは，環境に対する知覚が自己によって調整されると主張する。そして，自己が安全であるほど物事があるがままに知覚するようになるとしているが，重要なのは，脅威だと感じられるような対象や出来事に対して知覚が増幅されるという点である。Schnall, Harber, Stefanucci, & Proffitt（2008）の研究では，重い荷物を背負った状態で目の坂の傾斜を見積もるという知覚課題を用いて資源－知覚モデルを検証している。実験の結果，単独で坂の前に立って傾きを見積もった被験者は，親しく支持的な友人と共に課題を行った被験者よりも坂の傾斜をきつく見積もり（実験1），さらに，かつて自分を裏切った信頼できない友人を想像させて同様の課題を行うと，傾斜の見積もりは有意に急角度となった（実験2）。すなわち，孤立状態で苦しい経験をしている個人（この場合は単独で重い荷を背負った状態）は，周囲の環境をより大変なものとして評価すると考えられる。

社会的関係が環境認知に影響を及ぼすことは、距離の知覚においても報告されている。Morgado, Muller, Gentaz, & Palluel-Germain (2011) は、2名の知人の写真(全身像)を被験者の目の壁に投影し、その知人たちの間の距離を自分が通り抜けられるかどうか判断させる実験を行った。その結果、被験者が写真の人物たちと親密であるほど、「通り抜けられる」と判断する距離が短くなることを見出した。この研究は孤立やその脅威を論じているわけではないが、他者と自分との物理的距離の知覚が親密性によって変動し、親密な他者が作り出す空間は窮屈に感じないが、親密でない他者は空間をより窮屈に感じさせると解釈できる。同様の見解は、身体化認知(embodied cognition)に関する研究からも示唆されている(Knowles, Green, & Weidel (2014); Proffitt, 2006a; 2006b; Schnall, Witt, Augustyn, Stefanucci, Proffitt, & Clore (2005))。

資源-知覚モデルとは異なる文脈から類似のメカニズムを導いている研究もある。Cesario & Navarrete (2014) は集団間葛藤の文脈において、知覚された脅威に対する距離がどのように認知されるかを検討している。それによると、脅威および内集団メンバーの有無が、外集団に対する距離の知覚を規定し、その距離が外集団の危険性(脅威)によって調整されることを見出している。

これらの知見をいじめが生じている空間に適用するならば、いじめによって孤立化された被害者は、周辺環境を以前と異なるように感じる可能性を指摘できよう。資源-知覚モデルから予測されるのは、いじめが生じている空間は被害者にとって圧迫的な方向に過剰に認知される——すなわち自分を排斥する他者の存在は大きく感じられるのに対して、支持的・援助的な他者は遠くに感じられるような歪みを帯びているということである。そうであるならば、いじめ被害者にとって周囲の援助資源は、身近なものとして利用可能とは感じられていないことが予想されよう。孤立化の過程で被害者にもたらされる孤立無援感は、単にひとりぼっちであるという感覚にとどまらず、援助資源が遠くに感じられるという意味で無援感をともなっていると考えられる。

6. 今後の研究に向けて

いじめ研究は、被害者の視点からいじめという事態を理解する試みを十分には行ってこなかった。本稿では、いじめ被害者にとってもっとも共通性の高い孤立という状況が周囲の環境に対する認知をどのように変化させるかを、既存の研究を展望しながら考察した。資源-知覚モデル(Harber et al., 2008)を手がかりにいじめ被害者の環境認知を検討したところ、いじめが生じている環境中で、加害者はより圧迫的に肥大して感じられ、被害者を援助できるはずの資源は縮小され遠くに感じられる可能性が見出された。今後の研究では、これらの仮説を実証的に検討していくことが必要であるが、そのための課題を最後に整理しておきたい。

まず、上で述べた被害者の認知の変化には、加害者の肥大と援助者の縮小という2つの現象が混在している点に注意を要する。資源-知覚モデルでは、自己が安全であるほど知覚は歪みの少ないものになると考えられているが、いじめの空間において被害者の環境認知は、加害者が実態以上に大きな存在と感じられる場合と、援助者が遠くに感じられ存在感が低い場合の2つがあり得よう。

実際にはその両方の要因が同時に働いて孤立無援感を作り出すものと思われるが、研究の知見をいじめの予防・介入に役立てるには、研究上両者を区別しておく方が良いであろう。

次に、孤立はいじめの被害において広範に見られる共通点ではあるが、多くのいじめではそれ以上の攻撃が被害者に向けられていると考えられる。したがって、より厳しい状況にある被害者にとっての環境認知についても検討していく必要がある。資源-知覚モデルは自己の安全性の程度によって知覚が変容すると仮定しているため、被害状況の違いによる比較には好都合である。

3つ目に、近年増加しているサイバー空間を利用したいじめ（ネットいじめ）にも目を向ける必要がある。ネットいじめでは、いじめの時間的・空間的制約のなさなどの特徴が指摘されているため（加野，2011），いじめが行われる環境が生活世界全体に拡大する可能性がある。子どもの生活世界がそもそも大きなものではないことを踏まえると、ネットいじめは中井（1997）のいう「警戒的超覚醒状態」を持続させ、より深刻な影響をもたらすと考えられる。

いじめは、1980年代以降のわが国の社会変動の中で30年にわたり存続してきた問題であるが、この問題を取り巻く環境は現在大きく変わりつつあるように思われる。教育現場では、人口減少によって学校の規模縮小や統廃合などさまざまな変化が進展しており（葉養，2012），子どもや学校そのものの減少という従来あまり経験したことのない状況に直面しつつある。この変化がいじめ問題にどのような影響をもたらすかを含めて、被害者中心の視点による研究を進めていく必要がある。

文献

- 坂西友秀. (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究. 社会心理学研究, **11**(2), 105-115.
- 坂西友秀. (2011). 我が国におけるいじめの諸相（いじめの構造--いじめに見る現代社会と心のひずみ）--（いじめの要因を考える）. 現代のエスプリ, **525**, 28-41.
- Cacioppo, J. T., & Hawkey, L. C. (2009). Perceived social isolation and cognition. *Trends in cognitive sciences*, **13**, 447-454.
- Cacioppo, J. T., & Patrick, W. (2008). *Loneliness: Human Nature and the Need for Social Connection*. New York・London: W.W. Norton & Company.
- Cesario, J., & Navarrete, C. D. (2014). Perceptual bias in threat distance: The critical roles of in-group support and target evaluations in defensive threat regulation. *Social Psychological and Personality Science*, **5**(1), 12-17.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social - psychological adjustment. *Child development*, **66**(3), 710-722.
- DeWall, C. N., & Baumeister, R. F. (2006). Alone but feeling no pain: Effects of social exclusion on physical pain tolerance and pain threshold, affective forecasting, and interpersonal empathy. *Journal of personality and social psychology*, **91**(1), 1.
- Eliot, M., Cornell, D., Gregory, A., & Fan, X. (2010). Supportive school climate and student willingness to seek help for bullying and threats of violence. *Journal of School Psychology*, **48**(6), 533-553.
- Harber, K. D., Einev-Cohen, M., & Lang, F. (2008). They heard a cry: Psychosocial resources moderate perception of others' distress. *European Journal of Social Psychology*, **38**(2), 296-314.
- Harber, K. D., Yeung, D., & Iacovelli, A. (2011). Psychosocial resources, threat, and the perception of distance and height: support for the resources and perception model. *Emotion*, **11**(5), 1080.
- 波多野純 (2009). 残虐行為における他者の非人間化と自己の道具化について 心理学評論, **52**, 488-503.
- 葉養正明 (2012). 人口減少下の学校の規模問題と教育システム 国立教育政策研究所紀要, **141**, 7-17.
- 本間友巳 (2003). 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究, **51**(4), 390-400.

- 本間友巳(編著)(2008). いじめ臨床—歪んだ関係にどう立ち向かうか ナカニシヤ出版
- 石田靖彦・中村友一(2002). 中学生のいじめ体験に関する研究(2):「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」「解決者」の心理的特徴について 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, **168**.
- 磯部美良(2002). 子どもの関係性攻撃に関する研究の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域, **50**, 379-386.
- 藤山英順(1987). 学校教育と相談臨床(臨床部門) 教育心理学年報, **26**, 119-125.
- 加野芳正(2011). なぜ,人は平気で「いじめ」をするのか?:透明な暴力と向き合うために 日本図書センター.
- 粕谷貴志(2014). 近年の「いじめ」の問題の理解と対応をめぐる. 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」, **6**, 51-58.
- 木村真人・濱野晋吾(2010). いじめ被害における援助要請行動を抑制する要因の探索的検討. 東京成徳短期大学紀要, **43**, 1-12.
- Knowles, M. L., Green, A., & Weidel, A. (2014). Social rejection biases estimates of interpersonal distance. *Social Psychological and Personality Science*, **5**(2), 158-167.
- MacDonald, G., & Leary, M. R. (2005). Why does social exclusion hurt? The relationship between social and physical pain. *Psychological bulletin*, **131**, 202-223.
- 文部省(1985). 児童生徒の問題行動に関する検討会議緊急提言—いじめ問題の解決のためのアピール—. 文部省 1985年6月28日. <http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19850629001/t19850629001.html> (2014年9月3日閲覧)
- 文部科学省(2013). 学校における「いじめの防止」「早期発見」「いじめに対する措置」のポイント. <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1340769.htm> (2014年9月11日閲覧)
- Morgado, N., Muller, D., Gentaz, E., & Palluel-Germain, R. (2011). Close to me? The influence of affective closeness on space perception. *Perception*, **40**(7), 877-9.
- 森田洋司(監修)(2001). いじめの国際比較研究:日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析 金子書房.
- 森田洋司(2010). いじめとは何か:教室の問題,社会の問題. 中央公論新社.
- 森田洋司・清永賢二(1986). いじめ:教室の病い 金子書房.
- 中井久夫(1997). アリアドネからの糸 みすず書房
- Newman, M. L., Holden, G. W., & Delville, Y. (2005). Isolation and the stress of being bullied. *Journal of Adolescence*, **28**(3), 343-357.
- Newman, R. S., Murray, B., & Lussier, C. (2001). Confrontation with aggressive peers at school: Students' reluctance to seek help from the teacher. *Journal of Educational Psychology*, **93**, 398-410.
- 中村豊・岡本耕平(1993). 地理学選書メンタルマップ入門 古今書院
- 落合良行(1999). 孤独な心—淋しい孤独感から明るい孤独感へ— サイエンス社.
- Olweus, D. (1993). *Bullying at school: What we know and what we can do*. Oxford, UK: Blackwell.
- 大西彩子・吉田俊和(2010). いじめの個人内生起メカニズム—集団規範の影響に着目して—. 実験社会心理学研究, **49**, 111-121.
- 大野俊和(1996). 被害者への否定的評価に関する実験的研究:「いじめ」の被害者を中心として. 実験社会心理学研究, **36**, 230-239.
- 大野俊和・長谷川由希子(2001). 「いじめ」の被害者に対する外見のステレオタイプ 実験社会心理学研究, **40**, 87-94.
- Proffitt, D. R. (2006a). Embodied perception and the economy of action. *Perspectives on psychological science*, **1**, 110-122.
- Proffitt, D. R. (2006b). Distance perception. *Current Directions in Psychological Science*, **15**, 131-135.
- 齊藤知範(2000). 第7章 いじめ研究の展望と課題:分析視角の再検討 学校臨床研究, **1**(1), 55-66.
- 酒井亮爾(2006). 「いじめ自殺」と文科省の対策. 愛知学院大学論叢 心身科学部紀要, **2**, 51-60.
- 佐古順彦・小西啓史(編)(2007). 12環境心理学 海保博之(監修) 朝倉心理学講座 朝倉書店
- Schnall, S., Harber, K. D., Stefanucci, J. K., & Proffitt, D. R. (2008). Social support and the perception of geographical slant. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**(5), 1246-1255.
- Schnall, S., Witt, J. K., Augustyn, J., Stefanucci, J., Proffitt, D. R., & Clore, G. L. (2005). Invasion of personal space influences perception of spatial layout. *Journal of Vision*, **5**, 198-198.
- 芹沢俊介(2007). 「いじめ」が終わるとき:根本的解決への提言 彩流社.
- 下田芳幸(2014). 日本の小中学生を対象としたいじめに関する心理学的研究の動向 教育実践研究:富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, **8**, 23-37.
- Smart Richman, L., & Leary, M. R. (2009). Reactions to discrimination, stigmatization, ostracism, and other forms of interpersonal rejection: a multimotive model. *Psychological review*, **116**, 365-383.

- Smith, P. K., & Shu, S. (2000). What good schools can do about bullying findings from a survey in English schools after a decade of research and action. *Childhood*, **7**, 193-212.
- Smith, P. K., Talamelli, L., Cowie, H., Naylor, P., & Chauhan, P. (2004). Profiles of non-victims, escaped victims, continuing victims and new victims of school bullying. *British Journal of Educational Psychology*, **74**, 565-581.
- 杉原一昭・宮田敬・桜井茂男 (1986). 「いじめっ子」と「いじめられっ子」の社会的地位とパーソナリティ特性の比較. 筑波大学心理学研究, **8**, 63-71.
- 鈴木純江・鈴木聡志. (2008). いじめの被害者に対する支援--エンパワメントアプローチによるカウンセリングの適用と検討. カウンセリング研究, **41**, 169-179.
- Swearer, S. M., Espelage, D. L., Vaillancourt, T., & Hymel, S. (2010). What can be done about school bullying? Linking research to educational practice. *Educational Researcher*, **39**, 38-47.
- 高塚雄介 (2011). 総論／いじめ問題を再考する (いじめの構造--いじめに見る現代社会と心のひずみ). 現代のエスプリ, **525**, 5-27.
- 竹川郁雄. (1993). いじめと不登校の社会学: 集団状況と同一化意識. 法律文化社.
- 竹ノ山圭二郎・原岡一馬 (2003). いじめ状況想起におけるいじめ判断についての立場間比較. 久留米大学心理学研究, **2**, 49-62.
- 竹村和久・高木修 (1988). “いじめ”現象に関わる心理的要因: 逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾向. 教育心理学研究, **36**, 57-62.
- 戸田有一 (2010). 児童・青年の発達に関する研究動向といじめ研究の展望. 教育心理学年報, **49**, 55-66.
- 上地広昭 (1999). 中学生のいじめの対処法に関する研究. カウンセリング研究, **32**, 24-31.
- Unnever, J. D., & Cornell, D. G. (2004). Middle school victims of bullying: Who reports being bullied? *Aggressive Behavior*, **30**, 373-388.
- 浦光博 (2009). セレクション社会心理学25排斥と受容の行動科学: 社会と心が作り出す孤立. サイエンス社
- 山中大貴・平石賢二 (2013). 中学生におけるいじめ被害時の教師への援助要請: 生徒・教師関係と孤立傾向との関連から. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 253.
- Williams, K. D. (2001). *Ostracism: The power of silence*. New York: Guilford Press.
- Williams, K. D., Forgas, J. P., & Von Hippel, W. (Eds.). (2005). *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press.

